方向

第九九号　一九八九年六月八日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

俳話　木

―忘れ去られたトーテム―

柴野純孝

忘れえぬ事ども

先日偶々テレビのスイッチをいれたら、「近江の国魂と文学」なる題で、さる専門の方のお話しが出てきた。近江のきれいな山水が画面に現れ、何気なく聞いていると、話題の中心は人麻呂等の挽歌で、まことに楽しく、一時間ほどがまたたくまに過ぎ、芭蕉の句が画面に現れる。「ゆく春を近江の人と惜しみけり」であった。古代の挽歌と芭蕉と、何の関係があるのかと思ったが、だんだん講師の話を聞いているうちに、なるほどとうなずかれるのであった。かくして番組が終ったのであるが、同時に古い過去の事が頭に浮かんできた。

五十年以上も昔、大学の国文の時間に有川武彦先生が「ゆく春を」の句をとりあげ、これこそ俳聖一代の最高のものと託宣せられたのであった。そのときは、どうしてそうなのか腑におちないものの、尊敬する先生のお言葉をそのまま頂いて、漠然と今日にいたったのだが、あのテレビで、もやもやが一挙に氷解した思いであった。

生来あまり勉強好きでもないのに、どうしてこんな事が頭の中に残っていたのか自分でも分からないのであって、それこそ機縁とでもいうべきであろうか。ぜひ覚えておこうと思った事でも、やがて大半を忘れてしまうのが普通であって、いくら頭をかしげてもなかなか出てこない。また反対に一見なんでもないつまらぬ事が、瓢箪

から駒のように、忘却の彼方から飛び出す事もあり、これも本人自身にもよくわからぬ事である。これから述べようとするのも、以上を念頭においての事で、いわゆる論考ではさらさらなく、単なる空想の遊びであろう。

鰹　木

昭和五年頃の日本では、公立学校の神社参拝はまだ強制されてはいなかったが、所在地の祭日には授業は午前でうちきり、全校近くの神社に参拝して、現地解散が普通であった。休祭日の少ない当時では、たとい授業が二、三時間つぶれても生徒には大歓迎であった。どことなく浮き浮きとして、神社の境内に着いてもなかなか静かにならない。参拝は五年生から学年毎に行われ、われわれ一年生は最後であった。最敬礼の時はラッパの音が亮々と響いた。そのときだけは声をひそめるが、終わるとまた騒ぎだし、いつ教練の教官からどなられるか分からないのだが、上級生が全部おわるのをじっと待つのは退屈至極であった。

引率する担任の先生こそご苦労というものだ。放っておくのも具合わるく、大声でどなるのも体裁がよくないからの一計であろうか、やや低い声で、突然われわれにこう話し掛けられた。

「きみたち、あれ何か知ってるかい」

と、社殿の棟木の上にのっかっている丸太のようなものを指差すのであった。先生の意外な質問に、悪童連も、あっけにとられたように互いに顔を見合わすばかりで、声が出ない。しばらくにやにやしていたが誰も答える者がいないのを見て、「あれは鰹木というものだ」と先生は、いともおもむろにいうのであった。一同の顔には、

「さすが中学の先生だ」といったような感銘が見られた。しかし、なぜ鰹という魚の名前が棟木の上の丸太につけられたのか。不審をいだかざるをえないのであったが、そんな時、ひとつ上の学年参拝のラッパの音が亮々と響いてきたので　急いで整列し直すのであった。

これが鰹木なるものを知った初めで、ちょっと妙な感じはしたが、やがて念頭から全く消えてしまっていた。

鰹の事

よく歌われた串本節に勇壮な鰹釣の場面があるが、日本海辺に育った我々にはぴんとこない。というのは、日本海でとれる鰹はせいぜい一尺位のもので味もたいしたことはなく、とうてい四季の食膳を賑わすものではないからである。一般に泥鰹と呼んでいる。下の下というところであろう。そんなものが、どうして神聖な社殿の上に乗っかっているのだろうか。いったん念頭から消えた事柄が再び浮き上がってくるまでには、十数年の経過を待たねばならない。その時機というのは、船舶砲兵団の一員として、昭和十七年から十九年にかけて、南太平洋を航行した頃である。

広大な南太平洋を行き来する航海は、明日知れぬ危機をはらみながらも、一見のどかであるが、また単調、退屈そのものであった。例えば内地からラバウルへの直航は二週間、ラバウルからパラオへは一週間もかかり、来る日も来る日も、見えるものは海ばかりであった。そんな退屈さを時々まぎらしてくれたのが魚釣りである。大きな鱗ほどの擬餌をつけた三百米ほどの延縄を流すのであった。船では何人かの者が常時対潜対空の監視に立つ

のであるが、そのついでに延縄のほうも監視する訳である・八番線くらいの太さの釣り針であるから、それにかかる魚は相当な大魚である・魚がかかると航跡の中に魚のはね返る飛沫がひときわ鮮やかに見えてくる・すかさず、かかったと監視が叫ぶ・すぐ数人の者が船尾へ飛んでいって延縄をたぐりよせる・流れに逆らうので、かなり重く、二人では手におえない仕事で、魚を甲板に引き揚げるまでは、息つく暇もないくらいであった・甲板で暴れ回る魚を見て誰かがいった「気をつけろ、尾鰭で手を切るぞ」・すさまじい魚は長さが優に一米以上にも見えた・鰹であった・四十人分の刺身が作れたとの事であるが、あの日本海の小さな鰹と比べていうべき言葉もないくらいであって、これが鰹なるものの本当の姿であった・

ところがしかし、このような鰹にお目にかかるのは極めて偶然であって、釣れない時は一週間も延縄を流し続けても一匹もかからない・どうやら鰹は大群をなして、あの広い南太平洋を回遊しているものらしい・油を流したような赤道無風帯近くの海に忽然として数キロ米にわたって、一面に白波の泡立つのが見える事があったが、それが鰹の大群で、運よく出くわしたときは、朝から晩まで鰹が釣れるのであった・しいら、さわら、まぐろも釣れることがあったが、それらはほんの数匹で、鰹の大群の壮観とは比ぶべくもないものであった・

鰹木にふたたび

そのようなめずらしい鰹の大群にめぐりあった航海を終えて上陸したのが、パラオ群島のコロール島である・ここには南洋庁の役所があり、全南洋の政治、経済の中心で、アラフラ海へのダイバ船の基地でもあった・埠頭

へ上がると、街の方へ広い道が続いているが、周囲十数キロの小島であるから、十分ほども行かないうちに道はだんだら坂になって少し息が切れるのであった。両側には椰子の並木が見え、並木を通して林の中に点々と大厦高樓が散在している。かつてダイバー船で賑った頃の名残であろうか。今は人影も疎らである。坂道を登って行くと三十分ほどで道は平坦になり、振り返ると眼下に青々とした海が拡がり、南洋松島と呼ばれる島々が美しく浮かんでいるのが見える。適当なところで一服しようと場所を探しながらさらに二、三分行くと、広場に出た。辺り一面は密林であって住民の家らしいものも見えず、静まり返って、聞こえるものは蝉の声だけである。そんなとき思わぬものに出くわした。うす暗い密林にかこまれた広場の一角に、堂々とした建物が現れたのである。長さは十間もあろうか、ニッパ椰子の屋根ではあるが、柱や梁には見事な細工がなされてあり、すぐ、これは普通の住宅ではないと感付いたのであった。さらによく眺めてみると、屋根の両端は深い切妻になっていて、その姿はあの埴輪の家にそっくりなのである。二千年のタイムトンネルをくぐり抜けた思いで、高々とぬけるような青空にうかぶ棟を仰ぐと、丸太のようなものが、棟とは直角に点々と見える。何だろうか。しばらく思案していたが「ああ、こりゃあ鰹木だ」と気づいたのであった。

現地住民の集会所のようなこの建物は如何なる物であるのか。また屋根上にある鰹木は何であるのか。

この建築物は、前にもいったように、堂々としており、南洋各地、フィリッピンにも行ったが、かつて見た事もない物である。大した道具もない人たちがこのようなものをどうして造り上げたのであろうか、まさに驚嘆に値する。推測するに、建造物はこの島の人たちにとっては格別に神聖な所であるらしい。あるいは先祖の霊のこ

もる所であろうか。また集会所といっても、我々の考えるようないわゆる公民館などでなく、何か部族の重要な事件が起きた時、ここで、その祖先の前で集議されるのであろう。いわば日本内地の宮と同じ物であるに違いない。ただ鳥居がないだけである。内地の宮も、その成立の因縁は様々であるが、昔は田舎の宮では鳥居のあるのが少なかったようである。次ぎに、このような神聖な建物の棟に、なぜ鰹木が置かれているのであろうか。

その理由の一つは、建築物そのもののためにあるのであろう。この海域一帯はよく台風の発生する所だから、風によってニッパ椰子の屋根が吹き飛ばされないように適当な太さの木で押さえ付けるのであろう。内地の茅ぶきの屋根でも、何かそんな仕掛けを見ることがある。しかし棟の上から前後へ張り出して、これ見よがしに造作されることはないようである。それでは何のためであろうか。その理由として考えられるのは、トーテミズムかアニミズムに関係があるのではないかということである。一般にトーテムは部族の生存の根源に係わるものであり、例えばアイヌ人と熊の関係である。今の場合は間違いなく鰹であろう。

鰹とトーテム

日本人、中国人等、一般に大陸沿岸の人々は何でもこいで、毒のあるフグは言うに及ばず、タコ、イカ、ウニ、ナマコなどなんでも食べるのであるが、比島でも同様であった。ところがインド洋上の小さい島国では、様々の種類の魚が無数に生息しているのに、その島の住民は鰹だけしか食べないという話しが、最近、ある新聞に載っていた。南太平洋の島島でもおそらく同じであろう。パラオの広い環礁内にはいろんな魚が充満しているが、そ

れらを釣ったり、捕えたりしているのを見た事がない。ラバウルでもそうであった。してみれば島々の人にとって鰹は主食の最たる物となる訳である。しかし先述したように、鰹の大群にはなかなかめぐり会えない。一方せまい陸地での植物系の食物生産は極めて乏しく、増加せんとする人口は、島の人々にとって永遠の最主要問題である。ヤップ島などで長男以外の妻帯を認めないのもその一例であろう。

このように見てくると島人たちの、その生命共同体である鰹の来るのを待つや、まことに切なるものがあろうと察せられる。元来、風を防ぐために作られた丸太の中に、偶然、鰹に似たものがあり、お蔭で豊漁であったとすれば、その時、かれらはマナを感じたであろうか。集会場は高台にあり、鰹木は、はるか海上を望んでいる。押し寄せる鰹の大群は、鰹木の霊力にひかれて島に近づいてくるのであろうか。鰹木は、トーテムのシンボルであるらしい、ミクロネシヤ人の鰹に対する。

あのパラオ島の有名な集会所については、西田直二郎氏の『日本文化史序説』にも言及しておられるが、太平洋戦争中、昭和十九年三月三十日、アメリカ機動部隊の攻撃により、南洋最大の基地パラオ島が潰滅したとき、消失してしまったのであった。痛恨の極みである。

以上は鰹木なるものがトーテムに由来するであろうという、わが牽強付会説だが、残された問題を掲げて筆をおくことにしよう。

一、　ミクロネシヤ語では鰹のことをどう呼んでいるのか。

一、　神社の社殿には、大社造り、神明造り等あるが、いずれにも鰹木が乗っている。どちらが早いのか、原

点であるのか。

一、　遠いミクロネシヤから、どのようにして日本まで来たのか。どのようにして定着したのか。

※右は、原田への私信として送られたものだが、許しを得て掲載する。山本高一氏の『鰹節考』に「堅魚木と鰹節」の一節がある。堅魚木はカツオギである。次ぎのようなことをいっている。カツオギの起源は『古事記』朝倉宮の段に「堅魚を上げて舎屋を作れる家あり」から来ていて、出雲、大鳥（大阪）、住吉（摂津）、伊勢の各神社はいずれも柱は掘立で、千木は棟木と交差する。カツオギがなぜ棟の上に横に並ぶのかは建築技術上からだけでは分からない。貝原益軒、本居宣長は「常食とする堅魚は屋根の上で乾され」たからといい、橋守部は「鰹ふ木（かずけおぎ）の転化」、伊勢貞丈は「堅むる木の義」、黒川真頼は「葛緒木の義」ということを紹介したうえで、「現在でも一部の土人はその部落の隆盛を示すために獲物の骨やあたまを一定の場所に集めて飾りつけておくように、当時にあってもその氏族の勢力を誇るために、食料を目のつく場所に集めておく習慣があったのではなかろうか」という。この説は同書の解説者によって、カツオは実際に屋根に置けばたちまち腐る、と批判されている。狭い範囲ながら民俗学や文化人類学の本を漁って見たが、鰹木への論及はあまり見当たらず、柴野君のような観点のものはなかった。（牽強付会）と謙遜するが、松井了穎宗教学の講筵に列した人の着眼と言いうるのではなかろうか、無知なわたしの批評の限りではないが。（一九八九・六・四　原田憲雄）

※前号正誤　二二頁一二行　いいった→いった　　二三頁一行　いいが→いが

カラス

一九八九・五・二四　原田慶

雨の日が多くて晴天が三日と続かない。夕方からまた雨になるかもしれないという予報だが、久し振りに太陽を見たような気がした。十時頃、めずらしくカラスが庭で鳴いている。ここはカラスの通り道にはなっているらしいが、めったに木や屋根にとまらない。北は向かいのビルのアンテナに、西はすこし遠いアパートの屋上に、南は隣の寺の大屋根に、東はほとんどとまらずカラスは通り過ぎてゆく。いつも朝早くから遊んでいるのが、西のアパートの屋上、次によく鳴いているのが南の寺の屋根。西の方には寺が多くて、広い墓地があるからだろうか、カラスの声がよく聞こえる。この妙徳寺は、通り過ぎるときの目じるしにはなっているらしくて、楠の枝をはらって小さくしたときには、偵察にきたカラスがしばらく調べているようだった。特に変化がないとわかると、黙って飛んで行ってしまった。その後は、またもとどおり、めったにやって来ない。「カア」と鳴くのが嘴太カラス、「ガア」と鳴くのが嘴細カラスだということだけれど、その時によってどちらにも聞こえる。

朝、わたしが洗濯物を干していたとき、南の寺の屋根に夫婦のカラスがとまった。かってに夫婦だと思っているだけだけれども、ずんぐりしてすこし毛の色がうすく、黙っているのが雌カラス、黒く光って精悍な感じ、カアカア鳴いているのが雄カラスということにしておく。光っている方は相手に聞かせようとして声高に鳴いているが、ずんぐりした方は知らん振りをして黙っている。そのうちにふいと飛んで他の所へ移る。光った方は、そのままでカアカアいっていたが、辛抱できなくなって傍へ飛んで行く。それからしばらくはどちらも黙っていた。

光った方が東へ向かってすっと飛んで行くと、ずんぐりさんもすぐに後から飛んで行った。カラスの言っていることがわかったら面白いだろうと思うが、「ききみみずきん」の話のように複雑なことをしゃべっているとはとても考えられない。

庭のカラスがしつこく鳴いているので、そっと戸を開けて、足音をたてないように行ってみると、妙見堂の鳥居のそばの木の上に、二羽のカラスがとまっている。わたしが近づいたのを見て一羽が飛ぶと、後の一羽が下を見て鳴こうとしたのをやめて飛んで行った。下を見たら、黒と白のまだら猫が、地を這うようにからだを低くして、鼻先を上に向け、カラスのいた方をにらんでいた。猫とけんかしていたのだ。近頃めずらしく元気のいい猫だと思ったが、わたしがにらんだらあわてて逃げて行った。けんかをしていたのは朝の夫婦ガラスかもしれない。

ガレージの方へ行ってみると、キクにとまったシジミチョウが交尾している。雄の方が羽根を閉じたり開いたりしている。きれいなルリシジミだった。雌の方がすこし白っぽくて小さい。違う種類かと思っていたが、雄雌だったらしい。キクの先の方に小さなアブラムシがいて、黒いアリが登ったり降りたりしている。離れた枝にびかびかの若いテントウムシがいる。

テントウムシはアブラムシを食べます。アリはテントウムシを追いはらって、アブラムシを守ってやります。そしてアブラムシの背中をつついてお尻から出す蜜をもらいます。

という小学校の理科の教材がそっくりあると思って見ていたが、テントウムシはアブラムシの方へ行かず、いちばん遠い枝へ、羽根を開いて飛んだ。だめだなと思ってわたしが立ち上がったら、シジミチョウが驚いてばっ

と飛び上がり雌はひらひらと飛び去り、雄はその辺りの草の上を低く飛んでいた。

門の傍のサクラの葉が、早くからぽつぽつとすかし模様がはいって光がすけるのはどうしてかと思っていたが、近くの枝をひっぱってみると、五ミリくらいの緑色の虫がたくさんついている。これが葉を食べてそのうち毛の長い黒っぽい毛虫になるのだとわかった。すぐに物置から薬をかけるための噴霧器を出してきた。

サクラのほかに、クチナシ、モクレン、カエデ、カリン、ムクゲ、タケ、ヤマブキ、サルスベリ、モッコク、ナツメ、それぞれに毛虫がつく。主人が午後にはクルミにも撒くから道具をかたづけなくてもよいと言いに来た。

クルミに薬をかけるには屋根に上がらなければならない。噴霧器には、中くらいのポリバケツに一杯の溶液がはいる。この容器のベルトを肩にかけて左手でポンプのハンドルを上下させながら、ノズルを木にむけて撒布するにはかなりの力がいる。四月に雨漏りを調べるために屋根に上がった主人のあとから、わたしは初めてこの屋根に上がった。こわかったけれど何とか上がれそうに思ったので、今日もあとから上がっていった。屋根のいちばん上まで行ってそこに座り、容器をかかえて右手でハンドルを押さえる。主人はホースを引いてノズルをクルミに向ける。だんだん慣れてきてまわりをみたら、見えるはずの大文字山が、ビルに隠れて見えなくなっていた。どちらも屏風を立てたように大きなビルが建って、景色が狭くなっている。北の方は土地が高いからまだいくらか見えるが、すぐ近くに、大きなマンションが建設中だから、あれが完成すると北の山も見えなくなる。

やっと容器が軽くなったので終りにして、両手を後ろへついて、足を前に出してそろりそろりと下りた。風呂場の屋根は平らになっているので、クルミの落葉を集めて掃除をしているあいだ、主人はトユを調べたり、漆喰

が流れてしまわないようにビニールを貼り付けたりしている。見下ろすと庭がほんの小さな草むらに見える。木や草が伸び上がっているので地面が近いような感じがして、すぐに飛び降りられそうな気がする。高い所からはものの裏側まで見えてしまうから、ビルの上の方に住んでいる人は、心が捕われることが少ないだろうと思う。

カラスはいつも高い所から見ていて批評はしないけれど、人間がどんなとき、どういうことをするかを、よく知っているにちがいない。

かあかあ　カラス　お山へ帰る
あの空赤い　夕焼け　こやけ
あした天気になあれ

カラスは人といっしょに生きているから、お山の麓までしか帰らないけれど、夕焼けとカラスはよく似合う。子どものころには大きな夕焼けをよく見た。だんだん最近は、あんな大夕焼けは見られなくなった。

念ずれば花開く

一九九・五・二八　原田　慶

体操シャツに麦わら帽子で、庭の草取りをしていたら、Mさんから電話で、ご長男のおよめさんと一緒にきてくださるということだった。今月の初めに結婚式を挙げられたばかりの、およめさんには、初めてお目にかかる。わたしはうれしくて、さっそく服を着かえ、本堂にお香を焚いて待っていた。

花よめさんはすらりと背の高い明るい感じの方で、大学の研究室におられるという。振り袖を着る最後の機会だそうで、長い袂がういういしい。おかあさんのMさんは、辻が花染の灰紫の訪問着に、どこかの神社の縁起絵巻を写したような、めでたい内容だという帯をしておられた。ふだんは小学校に勤めて忙しいのだが、今日は大きな声も出さずに、にこにこしておられる。わたしの方があがってしまって「まあほんとうによくお出でくださいました」などと声を張りあげている。これから町内の挨拶まわりをされるのだという。わたしは若いころ、なぜそのようなことをするのかということの、本当の意味がわかっていなかった。今になって、人はそこに生きるために通らなければならない儀式があるということがわかってきた。何処にいっても人間は、そこに根をおろす心構えをしなければいけないのだということの大切さがわかった。

わたしもそのような儀式を通ってきた。しかしわたしはその意味を理解せず、大切にしてこなかった。近頃は、マンションや団地などでは、いつの間にか人が入れ替り、挨拶もなく、隣の人さえ顔も見ないというような孤立現象が起こっていると聞く。そんな在り方から、豊かなものは生れてこないことにみんな気づきはじめているにちがいない。この賢明な花よめさんは、きっとその儀式の意味をよく理解しておられるだろうという気がする。Mさんによって、わたしは人の在り方というものに気づかされた。彼女はどんなことにも無理せずに、自然とできてしまう人なのである。その自然な折りめ正しさが、相手にものを考えさせる。

本堂に上がって、日蓮上人のお像に出会ってから、長男の方の自動車で帰って行かれた。いっとき華やいだ妙徳寺は、すぐにまた静まった。

Mさんが何年かまえに、責任のある仕事を引き受けようかどうしようか迷っていた時に、三人の息子さんのどの人か忘れたが、「お母さんはどこへ行っても〃住めば都〃やさかい大丈夫」といって励まされたと聞いた。彼女はそれほどに、いつも与えられた処にしっかりと根を下ろし、たくさんの花を咲かせる人である。そう言えば、いつか、「念ずれば花開く」という言葉に感動したという話しを聞いた。ある日、仕事で遅くなって、夜道を帰る途中、家の近くの寺の門前に書いてあったのだそうである。

「ああそうや、念ずれば花開く、わたしも念じましょうと思って家に帰ったんやわ、そしたら三男がいたさかいそのことを話したら、『お母さんそらあかんわ、それは甘い、ものごとは何でもかもしれないがつくんやで』と言うやんか」

と笑っておられた。その頃は高校生だった三男さんも、もう大学を終えられる頃だと思う。

「念ずれば花開くかもしれない」その可能性を信じて、丹念にはぐくんでいるMさんだから、彼女のまわりには確かに、さまざまな花が開きつづけるものと、わたしは信じている。

玫瑰・車渠

―法華経巡礼　31―　1989.5.27.　原田憲雄

前回「七宝」の続きである。その前回（二四頁）で「エメラルドはラテン語smaragdus（緑石）に由来し」と書いたが、「ギリシャ語のsmaragdosに由来する」と訂正しておく。オックスフォードの『ギリシャ語辞典』は

「數種の緑石の名」と説明し、ヘロドトスの『歴史』に二つ用例があるという。その一は巻二の四四で、フェニキヤのテュロスにヘラクレスの神殿を見にゆき、奉納物のなかに二本の角柱を見た。一つは黄金製、いま一つは「闇中にも輝くほどの巨大なエメラルド製であった」（松平千秋氏訳）。その二は巻三の四一で、サモス島主ポルキュラテスの指輪が「黄金の台を付けたエメラルド製のもので、サモスの名工テレクレスの子テオドロスの作であった」（同訳）とあるもの。ギリシャはアレクサンドロス王の西インド侵入（BC三二七）以後、インドとの交通が盛んになった。ヘロドトスはそれより百年も前の人である。『歴史』にいうエメラルドが現在の宝石学でいうものと　同じかどうか。『法華経』のaśmagarbhaに当ててよいのかどうか。

なお七世紀中国で作られた百科事典の『藝文類聚』の馬脳の項に、産地として西南諸国、月氏、大秦を列挙し、魏の文帝の「馬脳勒賦」を引く。賦の序を厳可均の『全三国文』でみると「馬脳は玉の屬なり。西域より出づ。文理交錯し、馬の脳に似たるあり。故にその方人よって之を名とす。或は以て頸に繫け、或は以て勒を飾る。余に斯の勒あり、美として之を賦し、陳琳・王粲に命じて並びに作らしむ」というから、「馬の脳に似ている」のは、ここでは原石の産出形状ではなく、縞目を指している。王粲の賦に「文采の華飾を被り、朱緑と蒼皐を雑ふ」というのを見れば、この馬脳は、エメラルドではなく「めのう」であろう。

さて、「玫瑰」は、漢音バイクァイあるいはマイクァイ、呉音マイエ。これを「猫眼石」と訳したのは、「方便」「見宝塔」両品のその語に対応する梵文が karketana だろうと推定してのことだが、対応するとはいっても、びったりしているとはいいきれず、「授記品」では長行の二カ所に七宝名を列挙し、妙本では「金、銀、琉璃、

車渠、馬脳、真珠、玫瑰」だのに、梵本では suvarṇa(金) rūpya(銀) vaiḍūrya(琉璃) sphaṭika(玻璃) lohita-muktā(赤真珠) aśmagarbha(エメラルド・馬脳?) musāragalva(琥珀・車渠?)であって、karketana の語はまったくない。しかも正本では「七宝」といいながら、前は「金、銀、琉璃、水精、車渠、馬脳、珊瑚、真珠」と、いずれも八宝にしておいて、玫瑰がない。そこで「授記品」については妙本の拠ったテキストには karketana があったと考えるべきなのか、無いのに訳者の判断で加えたとすべきなのか、そこらがもうひとつはっきりしない。

「玫瑰」は、中国の文献では前三世紀の韓非の作といわれる『韓非子』外儲説左上に、珠を売ろうとする者がその箱を玫瑰で飾ったら、買う方が箱だけとって珠は返した、という話をのせる。『史記』に引用する前二世紀の司馬相如の「子虚賦」に「その石は則ち赤玉、玫瑰」とあり、集解に「郭璞曰く、赤玉は赤瑾なり、楚辞に見ゆ。玫瑰は石珠也」といい、「上林賦」にも「玫瑰、碧琳、珊瑚叢生す」とある。おなじ文を載せる『文選』の注に「玫瑰は火斉珠也」という。外儲説の話が韓非その人のものかどうかは問題だが「子虚・上林賦」が前二世紀のものであることは確かである。郭璞の「赤玉」の説明がくわしく具体的であるのに対し「玫瑰」については漠然としているところから察すれば、これがなお中国人には珍しい、外国産の宝石だったのであろう。郭氏は三世紀から四世紀にかけての人。『法華経』正本が訳されたのは二八六年だからほぼ同時代。妙本は四〇六年に訳され、『文選』の編集は一世紀あまりおくれ　その李善の注は七世紀後半に出る。玫瑰を「火斉珠」とするのは李善の注に見えるのだ。

火斉珠は『文選』の班固（三二-九二）「西都賦」に「翡翠火斉、耀を流し英を含む」といい、張衡（七八-一三九）「西京賦」に「翡翠火斉、絡するに美玉を以てす」というもので、その注には「火斉は玫瑰珠也」というだけだが、左思（？-三〇六）「呉都賦」に「火斉の宝」とあり、注に「異物志に曰く、火斉は雲母の如く重沓して開くべし、色は赤黄にして金に似、日南より出づ」という。日南は今のベトナムを指すのであろうが、この種の文献中の地名は確実とはいえない。七世紀に編纂された『南史』の「中天竺国」に産物の一つとして火斉をあげ「火斉は状雲母の如く、色は紫金の如く光耀あり。之を別てば則ち蟬翼、之を積めば則ち紗縠の重沓するが如し」という。これらの説明と猫眼石とは合いそうにない。ほかに、玫瑰を琉璃の異名とするものもある。

「真珠」シンジュ。梵語はmukta, muktikā, である。lohita-muktikāは赤真珠で「赤珠」ともいう。真珠のなかでは赤いものがもっとも貴重とされる。「授記」「見宝塔」「普門」の各品でlohita-muktikāが使われているが正本は訳さず、妙本はただ「真珠」とする。真珠そのものについての説明はいるまい。

「琉璃」ルリ。梵語はvaiḍūryaで、『法華経』では例外なく対応する。琉璃は、近山晶氏の『宝石・貴金属大事典』によれば、ラピス・ラズリlapis-lazuliの和名で、「群青」グンジョウともいい、青色の岩絵具として用いられてきた。アウィン（藍宝石）ラジュライト（青金石）ソーダライト（方ソーダ石）ノーゼライト（ユウ方石）の四種の鉱物の混合したものだそうである。紺青色のものが一般的だが、中国『魏略』では十色を数え、また『魏書』や『南州異物志』の記事ではガラスらしく感ぜられる。

「インドラ青玉」　梵語はindranīlaでmahānīlaともいう。インドラ（帝釈天）の所有する宝珠と伝え、因陀

羅宝といい、色が青いので大青因陀羅宝ともいう。中村元氏はサファイアのことだという。コランダム（鋼玉石）のうち、赤いものをルビーといい、それ以外のものはすべてサファイアというのだそうである。しかしルビーがラテン語のruber(赤色)、サファイアがsapphirus(青色)から出ているのだから、サファイアも青いのが一般なのであろう。インド、スリランカ、タイ、パキスタンが主要産地である。『法華経』では、「方便品」の梵文に「最上の琉璃、インドラ青玉」とあり、相当するのは正本では「異宝及明月珠」だろうが、その前にすでに琉璃が出ているので、明月珠を「インドラ青玉」に当ててよいのかどうか分からない。妙本では「琉璃珠」である。わたしは「琉璃珠」は「琉璃という珠」の意に読んできたが、どうやら「琉璃と（インドラ青玉という）珠」と読むべきだったらしい。漢訳仏典を読むのに、中国の伝統語法のみで律し切れない例のひとつであろう。

「珊瑚」サンゴ。梵語はpravāda で、別にvidruma(特別の樹)というのもあるが『法華経』では見ないようだ。珊瑚礁をつくるのは六放珊瑚。宝飾用は八放珊瑚のパラゴルギアに属するもので、赤、白、ピンクのものがある。正本は、梵文に無いところにあるかと思うと、有るところにない。妙本はほぼ対応しているが、「信解品」の長行で対応しているのに、偈では訳していない。これは偈を四字句に整えたため、やむなく落ちたのかもしれない。

「車渠」シャコ。中村元氏は、車渠の「原語は一般にはmusāra-galvaであると考えられている」といい、別にsankhaなども挙げる。ところが「琥珀」のところでいったように、musāra-galvaには「車渠、琥珀、馬脳、紺色宝」が訳語とされていて、はなはだ紛らわしい。sankhaは「螺貝」で、「吹奏楽器。Viṣṇu 神の象徴。Kubera神宝。竜神の名」などの義はあっても、要するに巻貝である。ところで妙本では「車渠」という語が十回出てくる。

その対応をここで確かめておこう。

序	正本	金 銀 珍宝 明月 真珠 車𤦲 馬脳
	妙本	金 銀 珊瑚 真珠 摩尼 車𤦲 馬脳 金剛 諸珍
	梵本	ヒラニヤ 白銀 金 真珠 摩尼 シャンカー シラー 珊瑚
方便	正本	黄金 白銀 水精 琉璃 馬脳 車𤦲 異宝 明月珠
	妙本	金 銀 玻璃 車𤦲 馬脳 玫瑰 琉璃 珠
	梵本	金 銀 スパーチカ アシュマ・カルケータナ 真珠 琉璃 インドラ
譬喩	正本	紫摩天金 明月珠宝 上妙珍異
	妙本	金 銀 琉璃 車𤦲 馬脳
	梵本	金 銀 摩尼 真珠
信解	正本長行	金 銀 珍宝 水精 琉璃 車𤦲 馬脳 珊瑚 琥珀
	妙本長行	財宝 金 銀 琉璃 珊瑚 琥珀 玻璃 珠
	梵本長行	ヒラニヤ 金 銀 摩尼 真珠 琉璃 シャンカー シラー 珊瑚 紫金 白銀
	正本 偈	紫金 珍宝 奇異財業 明珠 碧玉
	妙本 偈	巨富 金 銀 車𤦲 馬脳 真珠 琉璃
	梵文 偈	ヒラニヤ 金 銀 シャンカー シラー 珊瑚

授記

正本	1	金	銀	琉璃	水精
妙本	1	金	銀	琉璃	車渠
梵本	1	金	銀	琉璃	スパーチカ
正本	2	金	銀	琉璃	水精
妙本	2	金	銀	琉璃	車渠
梵本	2	金	銀	琉璃	スパーチカ

車渠	馬脳	珊瑚	碧玉		
馬脳	真珠	玫瑰			
赤真珠	アシニマ	ムサーラ			
馬脳	珊瑚	真珠			
真珠	玫瑰				

見宝塔

正本		金	銀	琉璃	水精
妙本		金	銀	琉璃	車渠
梵本		金	銀	琉璃	ムサーラ
正本		七宝珍奇			
妙本		種々珍宝		金	銀
梵本		金糸瓔珞		ヒラニヤ	金

珊瑚	赤真珠	アシニマ	赤真珠	カルケータナ	
琥珀	車渠	ムサーラ			
馬脳					

安楽行

随喜

琉璃	馬脳	珊瑚	琥珀		
摩尼	真珠	琉璃	シャンカー	シラー	珊瑚

正本	妙本	梵文	正本		
金	銀	ヒラニヤ	金	銀	雑珠

普門

琉璃	車渠	馬脳	珊瑚	琥珀	車渠
馬脳	真珠	琉璃	シャンカー	シラー	珊瑚
摩尼	明月	如意宝珠	水精	琉璃	車渠
馬脳					

珊瑚　琥珀

妙本　金　銀　琉璃　車渠　馬脳　珊瑚　琥珀　真珠

梵本　ヒランニャ　金　摩尼　真珠　金剛　琉璃　シャンカー　シラー　珊瑚　アシュマ

ムサーラ　赤真珠

右の表で見られるように、ムサーラガルヴァは四回でてきて、「授記品」の二回は妙本の玫瑰に、「見宝塔品」で車渠に、「普門品」ではむつかしいが強いて当てれば琥珀になろうか。これに対し、シャンカーは六回で「序品」と「信解品」偈で車渠に、そのほかではこれまたむつかしいが、梵本の「琉璃　シャンカー」という言葉の結び付き方を目安にすると、「信解品」長行では珊瑚、「安楽行」「随喜」「普門」の三品では車渠に相当することになり、全体としてシャンカーの訳語は車渠と見るのが自然なように観察される。

ところで「しゃこ」を日本の辞書も漢和辞典も、一様に「シャコ貝」とみる。例えば『広辞苑』『諸橋大漢和辞典』。「シャコ貝」の「シャコ」が車渠からきたのであろうから訝るほうがおかしいのだろうが、シャンカーは巻貝なのだから、車渠がシャンカーなら、二枚貝のシャコ貝であってはおかしいのだ。

服部忠重・小菅貞男氏の『原色世界貝類図鑑』によるとシャコガイTridacna科の貝には、シャゴウ、ヒメジャコ、ヒレジャコ、シラナミの一群とオオジャコがあり、オオジャコは二枚貝類で最大であり、殻長一メートル四〇センチ、重さ二三〇キログラムの記録がある。貝殻の内面が潔白で光沢のあるものが種々の装飾に使われたのは事実で、インドを含め世界の各地に広く流布した。しかしインドをはじめネパール、チベット、ビルマ、タイ、

中央アジア、中国、日本で聖なる貝とされたのは巻貝だった。ジェイン・F・セイファ夫人の『海からの贈りもの「貝」と人間』（杉浦満氏訳）は原著が一九八二年に出たものだが、インド、中国、チベットでは「シャンクガイ―聖螺―」が信仰上の色々な場面を具体化するための中心的な役割をもった象徴物であり、ヒンドゥウ教の儀式や図像に現れていることを指摘し、貝の白さは清浄を、海の産物であることは無垢を現わし、ヴィシュヌ神は必ずこの貝を持った姿の像として現わされること、チベット仏教では吹奏楽器として儀式に欠かすことができず、八吉祥の象徴のひとつとして図像学に出てくること、また、インド北部のヒンドゥー教徒、ネパール、シッキム、ブータン、チベットの仏教徒のあいだでこの貝が女性の結婚指輪に相当するものとされること、中国の皇帝が天候の平穏を祈る行事に白い大きな巻貝を使用し、ことに重要な人物が航海の旅に出るとき、左巻きのシャンクガイを貸しあたえ無事を祈ったことを紹介する。これらの事例の幾つかは、弟の原田禹雄が、論文で紹介し、その意義などを論じているが、夫人の本の方が流布しているであろうから引いた。夫人の言う「シャンクガイ」はたぶんśankhaで、学名をTurbinella pyrumと注している。前記の『貝類図鑑』には、この学名のものが見当たらぬが、要するに巻貝の大きな美しいものであろう。『法華経』の「車渠」は、śankhaの音写語であり、夫人のいうシャンクガイにほとんど違いない。ただ、シャコガイもその内面の潔白と、海から来たものとしての無垢性においては同様だから「車渠」の亜流となり、宝貴される貝はみな「車渠」と呼び、そのうち軒を借りたシャコガイが、あるじ顔をし、辞書にも「車渠はシャコガイ」と記されるようになったのだろうか。

「摩尼」マニ、摩尼珠マニシュともいう。梵語はmani　またはmani-ratna　珠玉の総称。「序品」「分別功徳

品」に見える。このほか「明珠」ミョウシュが「序品」「安楽行品」に、「浄明珠」ジョウミョウシュが「譬喩品」に、「如意珠」ニョイシュが「分別功徳品」に現れ、正本では「明月珠」ミョウガツシュという語も見える。ともにあかるく、汚れを浄化し、意のままに宝を出す珠というほどの意味を持ち、法、仏徳、戒などにたとえられる。如意珠はcinta-maṇiの訳語とされるが、『法華経』ではすべてmaṇiあるいはmaṇi-ratnaの訳語である。

「金剛」コンゴウ。梵語はvajra　宝石としては金剛石で、ダイヤモンドだとされるが、これまた今日の宝石学でいうものと一致するかどうかはわからぬ。武器の金剛杵を指すこともあり、雷をかたどり、仏教では迷いを破る法具とする。『法華経』では、「序品」と「普門品」ではvajraの訳語で、「序品」のものは宝玉だが「普門品」のものは金剛杵を持つ神と、山の名としての金剛である。「妙音菩薩品」にも二度出てくるが、対応する梵文は、ただの金であるsuvarṇa だ。

「甄叔迦」ケンシュクカ。梵語 kiṃśuka　赤い花をつける樹木の名。また赤い宝玉。『法華経』の「妙音菩薩品」に二度見え、正本は訳さず、妙本は「宝」を付けて宝玉としているが、梵文では、樹木ともとれそうだ。

上原淳道「私の日常から天皇を排除する」1989.6.6.　原田憲雄

日本戦没学生記念会機関誌『わだつみのこえ』第八八号（一九八九年五月二一日発行）に掲載の〈天皇の死を聞いて思ったこと〉という特集記事の一つである。その約三分の一を節略して左に転載する。

天皇制あるいは天皇その人に対して批判的な人々が集まる場所においては、きびしい、または、激しい、又

はラディカル（根元的）な意見であればあるほど、尊重され、歓迎されるということがあるかもしれない。／「言」と「行」とはもともと一致しないものだとか、完全に一致させるのは不可能だとか言ってしまえばそれまでだが、天皇制批判、天皇批判は、日本人にとってそれこそ根元的な問題であるだけに、自分自身の生活の隅々にまで実現できないようなことを、ただ勇ましく言っているのはまことに無責任のような気がする。／そうすると次には、私がなにを実行し、なにを実現しているかについて述べなければならなくなるであろう。日本の日常生活において天皇制や天皇にかかわりがあることをことごとく排除するのは至難のわざであるけれども、私は、つとめて、極力排除するようにしている。たとえば、元号は権力によって強制されないかぎり使用しない。また、天皇またはその代理者が開会式に臨席するような行事や催物には、開会式がすんでしまった後でも参加しない。さらにまた、勲章をもらった人に対してだけでなく、天皇またはその代理者の前で授与されるような賞をもらった人にたいしてもお祝いのことばを述べない。

上原氏が「実行している」という以上、確実に実行していることは、疑いえない。「なんだ、そんなことか」という人があるとしても、その人が、自ら言うことを実行しているとは、必ずしも信じえない世の中では、これはたいへんなことだ。といって感嘆することも、みずから、何がしかのことは実行しているのでなければ、「無責任」だ。わたしは薄志弱行の徒で、上原氏の文を引きはしても、批評に及ぶ資格はない。ただ天皇の命によってひきおこされた戦争で死んだ人々のことを、死にぞこなって薄志弱行をぶらさげながら老いぼれてもなお、忘れるかねている。氏の言葉を、おのれの愚かさにあてる鑑として、わたしなりの歩みを、ぼつぼつ運びたい。